

人種、暴力、エロティシズム：
『アブサロム、アブサロム！』における「黒人の肉体」への恐怖／欲望

吉岡 求

はじめに

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の代表作『アブサロム、アブサロム！』 (*Absalom, Absalom!*) は、彼の数ある著作の中でも「人種」の問題がもっとも前景化された作品であり、事実、物語の中心がヘンリー・サトベンによるチャールズ・ボンの殺害という「異人種間の兄殺し」に据えられていることから、我々は、小説の主題が旧南部における人種差別のイデオロギーにあることを、ひとまず前提としてよいだろう。南部白人男性であるヘンリーは、親友であり、妹の婚約者であり、また兄でもある男を、黒人の血を引いているというただその一事において殺さなければならない。いわば『アブサロム』は、旧南部の人種差別的な象徴秩序が引き起こす (主に白人から黒人への) 「暴力」を中心に据えた「共同体の悲劇」¹ であるわけだ。

しかし、ここであらためてテキストに立ち返り、『アブサロム』という作品に描かれる「暴力」について検討するとき、我々は、テキスト内で直接描写された「暴力」の場面が存外少ないことに気づかされる。たとえば、ヘンリーによるボンの殺害や、ウォッシュ・ジョーンズによるトマス・サトベンおよびミリー・ジョーンズの殺害など、作中においてもっとも衝撃的かつプロット上重要な「暴力」は、実はその「犯行」を直接目撃した者による証言 (語り) がまったく存在しないばかりか、「探偵」であるクエンティン・コンプソンとシュリーヴ・マッキヤノンによるあの有名な共同想像 (推理) においてさえ、直接の描写を欠いているのだ。『アブサロム』に限らず、フォークナーの諸作品は、それらが作中で描き出す「暴力」によってたびたび特徴付けられてきたが²、やはりそのそれぞれにおいてもっとも衝撃的な暴力の場面は、直接描写されることがほとんどない。『サンクチュアリ』におけるテンプル・ドレイクの強姦や、「乾いた九月」の私刑殺人などを想定すれば明らかなように、(性的なものを含む) 肉体的暴力は間接的な情報によって提示されるにとどまる場合が多いのである。とはいえ、フォークナー作品のモダニスト的性格を考慮すれば、これはさして驚くに値しない。モダニスト・アンダーステイメント的技法自体はフォークナーが自家薬籠中のものとするところであり、この場合、暴力自体の言語化不可能な強度、いわば「現実界」的な力は、「直接描写しない (できない)」ことによって、より効果的に表現されるのである。

このように考えてくると、あらためて (「一周回って」と言うべきか) 我々の目を引

くのは、むしろ直接描写された「暴力」ということになる。ここで注目したいのは、『アブサロム』第1章の終盤で語られる、サトペンと奴隷たちの納屋での格闘の場面である。我々は、フォークナーのモダニスト的手法を理解してなお、ここで繰り広げられるサトペンの暴力から、ヘンリーによるボンの殺害（とその動機）に劣らぬ衝撃と不気味さを感じとらずにられない。この場面で描かれるサトペンと奴隷たちの肉体的なぶつかり合いは、作品中もっとも明示的に描かれた暴力であると言ってよいが、我々はフォークナーのモダニスト的手法に鑑み、ここであえて「暴力が顕示される」ことの意味を問うてみてもよいだろう。

この場面が「不気味」であるのは、（ボンの殺害と同じように）現代の視点から見て明らかに「正しくない」人種差別に基づく暴力が公然と繰り広げられていることに起因するのでは、かならずしもない。我々がここで感じ取るのは、そこに表現される（白人から黒人への）「暴力」そのものの恐ろしさではなく、その行使自体が隠蔽・抑圧する「何か」の存在である。本稿では、ここでサトペンが抑圧しようとするものの正体を、彼が今まさに殴り倒している「黒人の肉体」が潜在的に秘める「暴力」への恐怖と、それへの欲望であると考えたい。この恐怖／欲望の起源は、少年期のサトペンと黒人との出会いに遡ることができるのだが、従来の批評家たちは、サトペンが自らのルーツとして回想するペティボーン家の黒人召使（いわゆる“*monkey nigger*”）との邂逅を重要視するあまり、サトペンと黒人の本当のファースト・コンタクト、すなわち、彼の父を軽々と担ぐあの“*a bull of a nigger*”の隆々たる肉体を無視してきたように思われる。本稿では、この「もうひとりの“*nigger*”」に連なる黒人の肉体のイメージの系譜に注目し、そこにサトペンの同一化の欲望を見出してみたい。

ここで見出される「黒人の肉体」への恐怖と欲望は、サトペンという特殊な個人に限定されるものではなく、南部白人が人種差別的イデオロギーとともに不可避に内在させてしまう象徴秩序の陥穽であると考えられる。そこで筆者は、サトペンにおいては直接の肉体的暴力として描かれた恐怖／欲望の抑圧と回帰が、後続世代であるヘンリーとボンの関係において性的なものとして見出しうるといふ仮説を立てたい。すなわち、サトペンによる黒人の肉体の抑圧（象徴化）が、ヘンリーとボンのホモエロティックな関係において再演されており、ボンの「黒い血」の解明が、その「不気味さ」を回帰させることになるのである。ヘンリーとボンの関係のホモエロティシズムを論じた先行研究は少なくない³。しかしその多くが、ヘンリーによるボンの殺害の動機を中心に人種問題から同性愛感情、あるいは異性愛から同性愛へとシフトさせようとする試みにとどまっております。人種とホモエロティシズムの有機的関係が十分に議論されてきたとは言い難いように思われる。この点に関してもっとも重要なのは Michael P. Bibler による『アブサロム』論であり、白人男性のホモソーシャリティが実は黒人の排除によって確認される白人同士の人種的同質性（Homo-ness）に依存していると論じる彼の構造分析的アプローチは、『アブサロム』における人種とエロティシズムの関係の基本的な見取り図として非常に優れたものとなっている。本稿は、Bibler の示した図式に依拠しつつ、

この「排除される黒人」を、白人男性にとって抑圧の対象であると同時に（あるいはそれゆえに）無意識の欲望の対象であると捉えた上で、ヘンリーによるボン殺害の動機を、人種と暴力／エロティシズムの関係を解きほぐすことで明らかにしていきたい。

ところで、『アブサロム』という小説のダイナミズムは、現在の語り手であるクエンティンとシュリーヴが、共同想像（推理）を通じて時空を超え、ヘンリー、ボンとの一体化を果たす場面においてクライマックスを迎えることになる。本稿の文脈で重要視したいのは、ここにおいて語り手のクエンティンは、シュリーヴとのやはり同性愛的な関係の中に、ヘンリーが直面した「不気味さ」を見出してしまうことである。クエンティンは、まさにいま自身が欲望の視線を向けているシュリーヴの「裸の肉体」に「黒人の肉体」が憑依する瞬間を目撃する。それはチャールズ・ボンであると同時に、納屋でサトペンと殴り合う奴隷たちでもあり、さらにはあの“a bull of nigger”でさえあるかもしれない。そして小説の末尾、あの有名なクエンティンの「僕は南部を憎んでなんていない！」という悲痛な叫びは、ボンを撃とうとするヘンリーの“No!”という否定の繰り返し、さらには黒人を殴り押すサトペンのサディズムと響きあうのである。以下、本稿では、サトペン、ヘンリー、クエンティンという三世代の物語の中心に「黒人の肉体」を設定することで、それが抑圧される過程で生み出される象徴秩序（物語）のメカニズムと、それが脱構築され、「不気味なもの」が回帰する瞬間、さらにはそれが時空を超えて伝播してゆく様子を観察していきたい。

1、いまだ振るわれざる暴力

まずは、本稿の議論の中心となる「暴力」の描写、すなわち、語り手であるローザ・コールドフィールドの視点を仮託された姉エレン・コールドフィールドが、夫であるサトペンと黒人たちの格闘を目撃する場面を引用してみよう。

Ellen seeing not the two black beasts she had expected to see but instead a white one and a black one, both naked to the waist and gouging at one another's eyes as if they should not only have been the same color, but should have been covered with fur too.... That's what Ellen saw: her husband and the father of her children standing there naked and panting and bloody to the waist and the Negro just fallen evidently, lying at his feet and bloody too, save that on the Negro it merely looked like grease or sweat—Ellen running down the hill from the house, bareheaded ... ran in, and the spectators falling back to permit her to see Henry plunge out from among the Negroes who had been holding him, screaming and vomiting—not pausing, not even looking at the faces which shrank back away from her as she knelt in the stable filth to raise Henry and not

looking at Henry either but up at him as he stood there with even his teeth showing beneath his beard now and another Negro wiping the blood from his body with a trowsack. (20)

すでに触れたように、この場面についてのもっとも一般的な解釈は、サトペンが、「自分の支配者としての優越性を保持しよう」と(21) 黒人たちを殴り倒し、それを後継であるヘンリーに見せつけることで、白人領主としての心構えを示してみせるという、いわば父から子へ白人至上主義的な「法」が伝達・教育されるというものである⁴。この解釈の有効性を考えるにあたって、我々はひとまず若きサトペン自身が、南部的な秩序を「教育」された場面へと立ち返らねばならない。

サトペン自身が「彼の唯一の友人である」コンプソン将軍(クエンティンの祖父)に語ったところによると、彼はもともと南部の出身ではなく、「ウエスト・ヴァージニアの山奥」のプア・ホワイトの家庭に生まれ、10歳になるまで黒人を見たこともないような生活を送った。その後、家族とともに流れ着いたヴァージニアの村でほとんどはじめて黒人奴隷たちと接することになるのだが、彼の人種意識を決定づけるのが、よく知られた白人領主ペティボーン家での黒人召使とのエピソードである。サトペンは父の使いでペティボーン氏に会うため、邸宅の正面玄関で黒人召使に取次を願うのだが、召使はみすぼらしい格好のサトペンを侮り、用向きも聞かず裏口へ回るよう命じて扉を閉めてしまう。この拒絶に衝撃を受けたサトペンは、南部を支配する人種や階級というイデオロギーを直観する。そして、裏口に回るよう召使に言わせた「やつら」(一義的には黒人や土地を所有できる農園領主たち)に対抗するためには、自分も「土地と黒んぼと立派な邸宅」を持たなければならない、と己の将来の「デザイン」を胚胎させる。

このエピソードは一般的に、サトペンの人種・階級意識の目覚め、いわば「他者」の発見として解釈される。つまり、サトペンはこのとき「奴隷」としての黒人を発見するとともに、「白人と黒人の間の差異だけではなく、白人と白人の間にも差異が存在している」ことを発見し(183)、自身と白人領主の間に存在する決定的な階級的境界を認識しているのだ。一言で言えば、サトペンは人種的・階級的差異を認識することによって、旧南部の社会秩序を内面化するのである⁵。しかし、サトペンの南部人化をひとまず受け入れた上で我々が注意しなければならないのは、サトペンの意図が南部社会のコードの再確認と教育だったとしても、あえて自ら諸肌を脱ぎ黒人と取っ組み合うというふるまい自体は、旧南部社会における白人領主の態度としては明らかに異常なものだということである。たとえばHelen Lynne Sugarmanは、「サトペンの自身の奴隷たちとの戦いは、ジェファーソンの富裕層社会の規範および道徳的慣習を平然と無視する」と述べている(99)。つまり戦前の南部においては、黒人はわざわざ肉体的な暴力をもって屈服させるまでもなく、奴隷としての人種的な劣位が確定しているのであり、白人の優位性は自明のものとして保証されているはずである。仮に黒人に対して自身の支配力を示さねばならないとしても、白人領主は奴隷への「罰」として彼らを鞭打てば

よいのであり、わざわざ対等な試合の場を設けて、「正々堂々」彼らを屈服させる必要はない。生粋の南部白人にとって、そのような行いは実際的に何一つ利するところがなく、だからこそ南部名家出身のエレンはサトペンの行いを咎めるのである (21)。

黒人が奴隷として象徴化されているという事態は、彼らをもはや実力（暴力）で屈服させる必要がないほどに人種の優劣関係が自明のものとなった状態を指し、極論すれば、黒人と肉体的に闘争するという可能性自体が完全に抑圧された状態を指す。ゆえに、ペティボーン家での一件において、実際にはペティボーンその人が一度もサトペンの前にその姿（肉体）を晒すことがないのは象徴的である。つまり、ペティボーンはサトペンにとって「実体がないからこそ象徴界（南部社会秩序）において圧倒的な力を持つ存在＝ファルス」なのであり、また、そこにおいてサトペンが「白人と黒人のみならず、白人同士の間にも差異が存在し、それは…目玉をくり抜く (gouging eyes) ようなことでは測れない」(183) ことを悟るのは、彼が「正しく」象徴界に参入したことを示しているように思われる。

しかし、にもかかわらず、成人したサトペンは納屋での格闘において、やはり黒人たちの「目玉をくり抜こうとする (gouging at one another's eyes)」のである (20)。ここでまったく同じ表現が用いられているのが偶然でないとするならば、我々は、「(ブア・ホワイトの) 実父を棄て、ペティボーンを象徴的な「父」として採用する」(Irwin 98)、あるいは南部の秩序を受け入れることによって「彼自身の *mountain society* の社会的、倫理的秩序に背く」(Davis 185) というような、サトペンの南部人化の言説を疑って見なければならぬ。なぜなら、暴力によって敵を屈服させることによって自身の優位性（マスキュリニティ）を確認するという手法は、ペティボーンに代表される南部白人たちのものではなく、“We whupped one of Pettibone's niggers tonight” (187) と誇らしげに語っていたサトペンの実父のものにほかならないからだ。すでに示してきたように、サトペンが南部的なイデオロギーから自由であると考えるときではもちろんないが、しかし少なくとも成長した彼の内に、実父に代表される肉体の強さ（暴力）をベースにした価値観と、ペティボーンに代表される制度としての人種をベースにした価値観が同居していることは注目しておくべきだろう。

我々は、サトペンの内に潜む価値観の二重性をどのように解釈すべきなのだろうか。たとえば T. H. Adamowski のように、サトペンにとって南部の人種差別主義は「デザイン」達成のための単なる道具にすぎないのだと考えるならば (Adamowski 145)、サトペンは南部的な人種差別を実践しつつ、同時にその「イノセンス」と「デザイン」をもって、実体を持たないにもかかわらず（あるいはそれゆえに）南部社会において人種の・階級的な支配力を持つペティボーンら南部白人領主を批判し、かつオルタナティブを志向しているのだと捉えうるだろう。すなわち、実態の伴わない奴隷制度という象徴秩序にあぐらをかく南部白人たちに対し、サトペンは実父になりかわって「暴力」というよりプリミティブな秩序を実践してみせることによって、南部白人たちの地位の空虚さを非難するのである。

もちろん、南部の人種差別的秩序に対し、サトペンの父が属する山奥の共同体の素朴さを、「フォークナーがたびたび言及する、人間のより純粋な良心の命に従う価値を備えている」(Davis 185)とまで理想化することは難しい。しかし、すでに指摘したように、黒人を奴隷として象徴化することの肝は、(少なくとも表面上)白人と黒人を暴力によってではなく、制度によって差異化することにこそ存在している。だとすれば、サトペンによる「暴力」の導入は、奴隷制度が依存している人種的な差異の境界を決壊させ、両者を肉体的な闘争の場へ引き下ろしかねない。

ただしこの象徴秩序の動揺は、「暴力」が独立した秩序として新たに導入されることによって発生するのではもちろんない。主人が直接手を下すことがいかに少なかったとしても、奴隷制度は根源的に(歴史的に)「暴力」に依存している。ならば、諏訪部浩一が述べるように「サトペンが周囲の黒人たちに対して取る「野蛮」な行動は、「紳士的」な白人の「父」達が黒人奴隷に対しておこなっている振る舞いのグロテスクなパロディになっている」のであり(諏訪部 391)、ここでサトペンが奴隷たちに振るう暴力は、その直接性と過剰性によって、奴隷制度が秘める根本的な暴力性を(サトペン自身の意思に反して)暴露するのである。また、この「暴力」こそが、奴隷制の根源にある南部白人たちの罪ならば、ペティボーンや白人のオーディエンスだけではなく、サトペンの父も、さらにサトペン自身もその罪によって裁かれねばならないのは明白である⁶。

しかし、サトペンが黒人たちを殴り倒していくことが、仮に旧南部秩序の罪を前景化するとしても、それはもっぱら我々読者にとってでしかない。ここで注意しておかねばならないのは、サトペンと黒人たちの取っ組み合いが、そこに群がる白人たちにとって一種のショーとして成立してしまっていることである。つまり、オーディエンスの南部白人たちにとって、そこで繰り広げられる暴力は、本来「抑圧されたものの回帰」が象徴秩序に対して持つはずの批判的、脱構築的効果を欠いており、むしろそうした秩序の維持と共犯的でさえあるのだ。フォークナーがこの場面を表象不可能とせず、むしろ詳細に描写してみせたことの意味もまたここに見出される。つまり、我々(あるいは若きヘンリー)にとってはグロテスクにも映る暴力が、(当時の習慣からは逸脱しながらも)南部白人男性たちには十分に受け入れ可能であり、ともするとエンターテインメントとしてさえ成立するというこのギャップに、あらためて旧南部秩序の根底に潜む暴力性、およびそれへの無自覚が批判にさらされることになるのである。

しかし、サトペンの奴隷たちに対する暴力が南部秩序と共犯的なパフォーマンスにすぎないとしても、やはり「制度」から「肉体的暴力」へ、すなわち人種差別的イデオロギーのより根源的な基盤にまで遡ろうとするサトペンのふるまいは、その根源性ゆえに、人種差別的イデオロギー自体を脱構築させかねない、危険を孕むものとして描かれることになる。というのは、この暴力的パフォーマンスの場面において、我々は肉体の描写を通じて白人であるサトペンが黒人奴隷たちと重なり合う瞬間を目撃することになるからだ。そこに示されるのは、抑圧しなければならぬはずの黒人の肉体こそ、実はサトペンにとって同一化の欲望の対象であるという驚くべき事態なのである。

問題の場面における彼らの肉体の描写をあらためて検討してみよう。注目すべきは“the two black beasts she had expected to see but instead a white one and a black one, both naked to the waist and gouging at one another’s eyes as if they should not only have been the same color, but should have been covered with fur too” (20、傍線引用者) という箇所である。黒人同士の殴り合いを想定したエレンは、「白い獣 (a white one)」と「黒い獣 (a black one)」が上半身裸になって互いの目をえぐりだそうとする光景を目にする。このとき「彼らは同じ色の肌のようにだった」と表現されているが、エレンの当初の想定からも明らかなように、この「肌の色」は当然「黒」のはずである。Davis はサトペンと黒人たちの描写の接近を論じて、ここには語り手であるローザのサトペンに対する恐怖が反映されており、「黒人たちの外見は、サトペンの性質の最終的な証明」であると述べている (190)⁷。

「暴力」あるいは「肉体」において黒人に接近するサトペンに気づいたとき、我々はふたたび若きサトペンと黒人との邂逅へと遡らねばならないが、それはすでに触れたペティボーン家の“monkey nigger”との出会いではなく、それよりさらに過去に発生したサトペンと黒人のファースト・コンタクトである。

[T]his one time by a huge bull of a nigger, the first black man, slave, they had ever seen, who emerged with the old man over his shoulder like a sack of meal and his—the nigger’s—mouth loud with laughing and full of teeth like tombstones[.] (182)

サトペンの人種意識を論じる批評家たちの多くは、それがいかなるものであれ、“monkey nigger” にその端緒があることを疑ってこなかった。一方で、酔っ払った父親を担ぐこの“a bull of a nigger”との出会いは、それがサトペンにとって黒人という存在をはじめて認識した体験であったことが明記されているにもかかわらず、不当に閑却されてきたように思われる。しかし、すでに黒人へ接近していくサトペンの肉体を確認した我々は、そのイメージ的な起源が、あの“monkey nigger”ではなく、この“a huge bull of a nigger”にこそあるのに気づくはずだ。酔っ払った父親を「とうもろこしの袋でも担ぐように」軽々と担いであらわれた「大きな牡牛みたいな黒人奴隷」は、「墓石のような歯を覗かせて笑っている」。「白い歯」は、色の対比において「肌の黒さ」を際立たせるため、白人による黒人描写の定番の一つであり、実際、成人したサトペンが所有する黒人たちの描写にも用いられている (“the face and teeth of the wild negro” [16]、 “the negro turned upon him with the stick lifted and his teeth showing a little” [17])。そして、やはりと言うべきか、「白い歯」は、納屋での戦いに勝利し誇らしげに立つサトペン自身の顔にも鮮やかに、不気味に照り映えており (“he[Sutpen] stood there with even his teeth showing beneath his beard now” [21])、その後もサトペンの顔貌のほとんど記号的な特徴の一部として反復され

る(44、151、229など)。こうした黒人の(あるいはサトペンの)肉体描写は、端的に言えばその強靭さを強調するものであり、それは「猿」や「風船」に例えられる黒人召使の描写とは対照的である。

このとき思い出されるのは、肉体をベースにした実力(暴力)主義と、制度としての人種(肌の色)をベースにした南部秩序、というサトペンが内面化した二つの価値観であり、前者に“a huge bull of a nigger”、後者に“monkey nigger”がそれぞれ対応していると考えられる。ところで、“monkey nigger”との出会いにおいてサトペンが南部秩序を内面化するとき、南部白人はたとえ財力が伴わないにしても、制度上、常にすでに黒人に優越する存在として認識される。具体的には、姿を見せないファルスとしてのペティボーンはかならず“monkey nigger”の上位に存在し、かつ“monkey nigger”がペティボーンの「所有物」である以上、貧しくはあっても自由な白人であるサトペン自身も本来は黒人に優越する存在である、とサトペンは考えることができるのである。そうであるからこそ、サトペンは黒人に軽蔑されることに憤りつつも、(少なくとも意識的には)黒人を闘争の対象に選ばない。しかし、肉体的な強さに基づいてサトペンが自身の生きる世界を象徴化する過程においては、そこで「父」として君臨するのは、実は彼自身の父ではなく、ましてやペティボーンでさえない。というのも、「ペティボーンの黒んぼを殴ってやった」という父の言葉を耳にしこそすれ、幼いサトペンが実際に目にしたのは、意識をなくした父を軽々と持ち上げる牡牛のような黒人の姿にほかならないからだ。つまり、暴力を秘めた肉体によって秩序が形成されるのならば、そのヒエラルキーの頂点に君臨するのは、白人の(実父の)肉体ではなく、あの“a huge bull of a nigger”の肉体である。だとすれば、サトペンが暴力によって南部の秩序を再編成(あるいは黒人を再抑圧)しようとするとき、彼の肉体の描写が“a huge bull of a nigger”のそれに接近していくことは偶然ではありえず、そうした象徴秩序で「父」になろうとする限り、サトペンは黒人に同一化せざるを得ないのである。

ここで注意しておかねばならないのは、黒人に潜む暴力が白人に恐怖され、また無意識に欲望されるのは、黒人が本当に暴力的な存在として描かれている(作者が黒人の暴力性を認めている)からではなく、白人が黒人に対して暴力をふるった瞬間、すなわち、歴史的に言えば、暴力が象徴秩序として採用された瞬間に、白人は黒人の報復を想定しなければならず、まさにそのとき、いまだ振るわれざる黒人の暴力は白人のそれを凌駕するポテンシャルを(白人から見て)獲得することになるからである。端的に言い換えるならば、南部白人は自らが黒人に対して行使してきた暴力を、黒人自身に転移させた上で、さらに抑圧する、という心理的操作が行われているのだ。ゆえに、サトペンの実父がペティボーン家の黒人に振るった暴力を誇ることに、彼が牡牛のような黒人に力なく担がれ、投げ出されることが、小説内でほとんど同時に描かれていることは偶然ではない。サトペンが、実際には一度も黒人が白人に暴力をふるった場面を目撃していないにもかかわらず、それでもなお黒人の肉体を恐れねばならないのは、彼の父が黒人に暴力を行使したという事実ゆえであり、より根本的には、暴力による黒人の支配を象徴秩

序において強いられる南部白人に自らを同化させてしまったがためなのである。『アブサロム』という小説は、この「いまだ振るわれざる黒人の暴力」を、可能性として提示しつつも、決して直接描写しようとし⁸ない。そのこと自体が、『アブサロム』において真に重要な暴力とは、描かれた白人から黒人への暴力ではなく、描かれなかつた黒人の暴力であることを、逆説的に示しているのだ。

たとえば Slavoj Žižek は、象徴界に対する現実界を「たえがたいほど強烈で不可解な、我々の欲望の究極の対象を指す」（43）と説明している。誤解のないように注釈しておけば、これは「現実界」に対する意識的な欲望が自我の起源に存在することを意味するのではない。たとえば旧南部における白人社会が黒人を、（後述するように）ホモソーシャルリティがホモセクシュアリティを排除・抑圧することで成立しているように、あらゆる象徴秩序はその中心に排除・抑圧の構造を孕んでおり、逆に言えば、排除・抑圧されたものに依存して成立している。ラカン、ジジェク的には、このとき排除されたもののことを現実界と呼ぶ。そして我々が通常「欲望」と呼ぶものは、たとえば黒人を殴る（あるいは制度的に黒人を服従させる）ことであつたり、「男たちの絆」を強化する（あるいは異性愛の対象を求める）ことであつたりするように、この現実界を排除・抑圧することそのものを指しているが、そうである以上「欲望」もまた現実界にその否定という形で依存しているのである。つまり、象徴秩序は、それを否定するという形で現実界を必要としつづけるのであり、それゆえ現実界は「欲望の究極の対象」であるのだが、その「欲望」を認めてしまえば、排除・抑圧の構造が崩れ、象徴秩序そのものが（ひいてはそれに依存する個人の自我が）崩壊してしまうため、「たえがたいほど強烈で不可解」でもあるわけだ。

ラカン、ジジェク的な三界をサトペンの心理に当てはめるならば、サトペンにとっての想像界が、おそらく自身が（あるいは彼の実父が）最強の暴力を有し、その行使が他者の支配を意味する全能感にあふれた世界認識であるのに対し、象徴界とは“*monkey nigger*”との出会いによって内面化した南部秩序、すなわち、経済力と人種的差異が人間の地位を決める世界認識であり、そこで暴力は表面的に抑圧されている。そして現実界とは、彼が想像界において暴力による支配を内面化すると同時に発生した、被支配者である黒人の、いまだ見えざる暴力の可能性なのである。だから、サトペンが黒人との同一化を無意識に欲望することと、彼が黒人を抑圧しようとすることは矛盾しない。黒人が潜在させる暴力は、一度顕在化すればサトペンの想像的な全能感ばかりか、実際には暴力に依存している南部の象徴秩序さえ破壊しうるため、「たえがたいほど強烈で不可解」である一方、サトペン自身が行使できる暴力の常に一歩先にある、より強力な暴力の可能性であるがゆえに、彼にとって、あるいは南部白人にとって、「欲望の究極の対象」である。そしてその現実界的な力は、『アブサロム』において間接的に提示され続けながら、決して表面化しないことによって常に担保され続けるのだ。

2、犯す／犯される欲望

さて、幾度か触れたように、サトペンが奴隷たちに振るう肉体的な暴力と、サトペン自身の「黒人化」は、若きヘンリーに衝撃を与え、彼を嘔吐させる。このときヘンリーは、サトペンが家族を棄て世に出たのと同じ一四歳、すなわち彼が“*monkey nigger*”に出会い、南部の社会秩序を内面化したのと同じ歳に設定されているのだが(40)、藤平育子は「もし、ヘンリーが一四歳だったことをサトペンが意識していたならば、彼自身が世界に出て立身出世を果たす決意をした年頃と重ね合わせて、「父のやりかた」を息子ヘンリーに教育する、いわば、父による息子のイニシエーションだった可能性が高いだろう」と述べている(52)。しかし、再三指摘してきたように、このときサトペンがヘンリーに継承させようとする秩序は、たとえ南部の人種差別制度と共犯的であれ、肉体的な暴力による支配そのものである。ということは、サトペン自身が“*monkey nigger*”（と不在のペティボン）との出会いから、少なくとも表面上は暴力に拠らない象徴秩序を学んだのとは対照的に、生まれたときから南部白人の間で育ち、人種的な差異を所与のものとして受け入れていたはずのヘンリーは、そうした差異が今まさに「暴力」に一元化され、溶解するかもしれない危機に遭遇することになる。

ここでヘンリーに伝達されるのは、暴力によって黒人を屈服させねばならないという白人の「法」だけではなく、それが抑圧する黒人の暴力への恐怖であり、また欲望でもある。たとえば *Bibler* は、ここでサトペンが黒人に対して行使する暴力の性的な意味を論じ、サトペンがヘンリーに対し「白人男性が男性奴隷に対して築くべき「正しい」関係が、愛情 (*affection*) や欲望 (*desire*) ではなく、暴力的な支配の関係であること」を教育しているのだと述べている(84)。異人種間の暴力の問題をクィアの視点から論じる *Bibler* の手法は、サトペンの人種的なコンプレックスの、ヘンリーさらにはクエンティンへの伝播を考えるにあたって、非常に有効な手段であるように思える。というのも、黒人の肉体への恐怖と欲望は、ヘンリー、ボン、ジュディスの性的な三角関係においてふたたび問題化されることになり、さらにその物語をなぞるクエンティンもまた、友人シュリーヴとのホモエロティックな関係の中に同じものを見出すことになるからである。

ヘンリーとボンとの関係にホモエロティシズムが存在することは、これまでもたびたび指摘されてきた。このとき、多くの批評家がまず注目するのは、ヘンリーとボンの関係を物語るコンプソン氏の以下のようなコメントである。

Because Henry loved Bon. (71)

Because he was her first and last sweetheart. She must have seen him in fact with exactly the same eyes that Henry saw him with. And it would be hard to say to which of them he appeared the more splendid—to the one

with hope, even though unconscious, of making the image hers through possession; to the other with the knowledge of the insurmountable barrier which the similarity of gender hopelessly intervened[.] (75-76、傍線引用者)

It was because Bon not only loved Judith after his fashion but he loved Henry too and I believe in a deeper sense than merely after his fashion. Perhaps in his fatalism he loved Henry the better of the two, seeing perhaps in the sister merely the shadow, the woman vessel with which to consummate the love whose actual object was the youth[.] (85-86)

こうした記述を文字通り受け取れば、ヘンリーとボンの間に友情以上の感情があったことは明らかなように思われる。ただし、重要なのはここにホモエロティシズムが垣間見えるということよりも、むしろコンプソン氏がこうした関係をためらいなく言語化できているということである。つまり、コンプソン氏の語りにおいては、ホモエロティシズムがホモソーシャルな言説の中に組み込まれ「正しく」象徴化されているのだ。

当然、ここで念頭に置かなければならないのは、Eve Sedgwickによるホモソーシャル理論である。Sedgwickによれば、「潜在的に切れ目のないホモソーシャルとホモセクシュアルの連続体」は、その根源的な連続性にもかかわらず、近現代社会においては徹底的に切断されてきたのであり、そのときホモソーシャル（すなわち「男たちの絆」）は「強烈なホモフォビア、すなわち同性愛に対する恐怖と嫌悪として特徴付けられる」（1-2）。言い換えれば、ホモソーシャルな行為や言説は、ホモソーシャルリティと根源的に不可分であるはずのホモセクシュアリティを排除・抑圧しつつ、「男同士の絆」の内にホモエロティックな欲望を満たす装置として働くのである。Sedgwickによれば、ルネ・ジラルールによって提示されたいっけん異性愛的に見える男女の三角関係、すなわち一人の女を巡る男同士のライバル関係は、この「ホモソーシャルな欲望」を達成するもっとも基本的な構造を示している。このときライバル同士に生まれる絆は、それぞれが女性に対して抱く欲望そのものより強固であるばかりか、同性愛的な欲望と実は不可分なのだが、にもかかわらず「イデオロギー上はホモフォビア」として現れる（Sedgwick 24-25）。さらにSedgwickは、ヴィクトリア朝ジェントルマンにおけるホモセクシュアルな欲望が象徴化される過程を論じ、ブルジョワ階級によって描かれる貴族の同性愛趣味は「東洋趣味」や「デカダンス」という曖昧なもので言語化されたり、パブリック・スクールにおける同性愛が友愛の名のもとに象徴化されることを指摘している（172-175）。

こうした説明は、コンプソン氏によるボンとヘンリーのホモエロティシズムの象徴化の詳細な解説になっていると言っても過言ではない。

Yes, he loved Bon, who seduced him as surely as he seduced Judith the country boy born and bred who, with the five or six others of that small undergraduate body composed of other planters' sons whom Bon permitted to become intimate with him, who aped his clothing and manner and (to the extent which they were able) his very manner of living, looked upon Bon as though he were a hero out of some adolescent Arabian Nights who had stumbled upon a talisman or touchstone not to invest him with wisdom or power or wealth, but with the ability and opportunity to pass from the scene of one scarce imaginable delight to the next one without interval or pause or satiety. And the very fact that, lounging before them in the outlandish and almost feminine garments of his sybaritic privacy, the professed satiety only increased the amazement and the bitter and hopeless outrage. (76)

Don Merrick Lilesによれば、コンプソン氏によって強調されるボンのデカダンス（「アラビアンナイトの主人公」のように、「異国的で女性的な服」をはおり、「世に倦んだような顔」をする）は、ボンの同性愛的な雰囲気をもステレオタイプ化し危険のないものに変える（103）。さらにこのヘンリーとボンの関係は、ボンがヘンリーをニューオリンズの娼館に連れて行くことにも表されるように、結局は異性愛の文脈で語られることになり、その最たるものがジュディスを媒介とした三角形の構図である。ボンとヘンリーの関係のホモエロティシズムをホモソーシャルな象徴化のもとで楽しんでいるのは、もちろんコンプソン氏のみではなく、クエンティンとシュリーヴの共同想像もまたホモエロティックな欲望のもとになされている。彼らの想像するヘンリーは、女物のローブを着たボンに見つめられ、顔を赤らめながら「あなたのような兄が欲しい」と告白し（253）、

“All right. I am trying to make myself into what I think he wants me to be; he can do anything he wants to with me; he has only to tell me what to do and I will do it; even though what he asked me to do looked to me like dishonor, I would still do it” (264)

と独白する。実際の関係がどのようなものであれ、少なくとも『アブサロム』の語り手たちによって語られるボンとヘンリーの関係は、ひとまず典型的にホモエロティックなニュアンスを含んだホモソーシャルリティにすぎず、南部社会の秩序にとって攪乱的でも転覆的でもない。たとえ我々がそこにエロティックなものをどれだけ見出そうと、彼らにとってそれは十分に受け入れ可能なほど象徴化されている。

ここで注意しなくてはならないのは、ホモソーシャルリティによるホモエロティシズム

の象徴化は、当事者である二人がどちらも白人であるという前提に基づいてはじめて機能するということである。繰り返すが、旧南部の人種制度において黒人は動産なのであり家畜なのだから、白人男性同士に機能するホモソーシャリティは、異人種間でももちろん機能しない。というよりも、むしろ白人同士のホモソーシャリティ自体、実は黒人および女性を排除することで成り立っているのである。Bibler は、本稿でもくり返し問題にしてきた納屋での格闘を取り上げ、その空間においては、サトペンが黒人を倒すことで白人のマスキュリニティを確認し、さらに（妻であるエレンをそこから排除して）南部白人男性のオーディエンスとそれを分かち合うことによって、強固なホモソーシャリティを生み出していると論じている。Bibler によれば「サトペンの超男性的な (hyper-masculine) 白人至上主義のパフォーマンスは、彼が依存する黒人奴隷と彼自身の差異を具現化 (reify) する。そして彼が支配された黒人の肉体を見下ろして立つとき、その姿が主人／奴隷の垂直的な結びつきをふたたび目に見える形で主張するとともに、彼の勝利はまた彼の周りに集う白人男性たちの水平的な連帯を強固なものにする」(90)。さらに Bibler は、サトペンの連帯が、実は「黒人たちの性的な支配によって促進されるホモエロティックな同一化に基づいている」という重要な指摘を行っている(90)。

Bibler にならい、ここで繰り返される暴力をセクシュアルな表象として解釈するならば、暴力によって屈服すること／させられることは、ようするに「犯す（挿入する）／犯される（挿入される）」の関係性によって、それぞれのマスキュリニティが確立、抑圧されるという状況を示している。Betina Entzminger によれば、旧南部において黒人を「人間」とみなさない人種混淆禁止の法は、白人と黒人との同性愛行為をより違法性の低いものにし、さらに“masculinist culture”においては、挿入される側は *offensive* とされるが、挿入することは相手に対する支配力を示し、挿入する側はかならずしも同性愛者とされない(82)。つまり、白人と黒人の同性愛行為は、白人が黒人を犯すという非対称性が維持される限り性愛関係として認識されず、支配・被支配の関係の証明、言い換えれば、白人のマスキュリニティの証明として捉えられるのである。ここで Entzminger の観察と、白人同士の絆の関係を整理すれば、白人男性は黒人を犯すことによって自らのマスキュリニティを確認した上で、安心して（マスキュリニティを剥奪される心配なく）白人男性同士のホモエロティックな絆に耽溺できるのである。このように、南部のマスキュリンな象徴秩序においては、同人種・異人種間の同性愛をそれぞれ象徴化する手段が用意されているものの、重要なのは、前者の関係においては「常にすでに犯されている黒人」が無意識の参照枠として存在することによって、象徴的には「挿入する／される」ことの非対称性、すなわち、どちらかが男性的でありどちらかが女性的であるという差異を意識する必要がないのに対し、後者の関係においては、白人が黒人に対し常にマスキュリニティを保持し続けなければならないのである。

こうした表現は、サトペンと黒人奴隷たちの関係においては、ひとまずメタファーにすぎないかもしれない。しかし、ヘンリーとボンの関係におけるホモエロティシズムの

前景化に鑑みるとき、それは間接的な比喩表現であることをやめ、彼らの間に発生する人種的な葛藤をむしろ直接的に浮き彫りにするように思われる。つまり、ボンが黒人であると判明したとき、なぜヘンリーは彼を殺して出奔するほどの衝撃を受けなければならぬのかという問題は、人種と暴力／エロティシズムの関係を解きほぐすことによつてのみ解決されるのではないか、ということだ。

ではあらためて、ボンの正体とともに明かされるヘンリーの欲望のあり方について考察していこう。すでに触れたとおり、ボンが白人である限り、ヘンリーは自身からボンへの欲望を、ジュディスを媒介にすることによってホモソーシャリティへと象徴化できる。さて、ここでボンが黒人であることが発覚すると何が起きるだろうか。もちろん黒人が「人間でない」以上、ヘンリーとボンの関係がホモソーシャルな連帯として象徴化されることはありえない。このとき、ヘンリーがボンに対して「正しく」結ぶことができる（性的）関係とは、人種的差異に基づく支配／被支配の関係である。だとすれば、ヘンリーはボンを「犯す（挿入する）」側に回ることによって、ひとまず己の同性愛的欲望に向き合うことなく欲望を象徴化することができるかもしれない。しかし、ここであらためて確認しておかなければならないのは、異人種間の同性愛関係を支配／被支配の関係に還元すること自体が、奴隷制度下において暴力による支配原理を実践するのとはほとんど同じ意味で、脱構築的な倒錯をはらんでいるということである。というのも、マスキュリニティが犯す／犯されることによって確認／剥奪されるのならば、それは暴力による支配関係と同様、制度としての人種的差異以前の原理として存在しうるのであり、人種的（制度的）差異を解体する可能性を秘めていることになる。ゆえに、ヘンリーとボンとの間で交わされる緊張感に満ちた以下の会話は、サトペンと奴隷たちとの納屋での戦いの再演として解釈することができるだろう。

—Who will stop me, Henry?

—No, Henry says. —No. No. No.

Now it is Bon who watches Henry; he can see the whites of Henry's eyes again as he sits looking at Henry with that expression which might be called smiling. His hand vanishes beneath the blanket and reappears, holding his pistol by the barrel, the butt extended toward Henry.

—Then do it now, he says.

Henry looks at the pistol; now he is not only panting, he is trembling; when he speaks now his voice is not even the exhalation, it is the suffused and suffocating inbreath itself:

—You are my brother.

—No I'm not. I'm the nigger that's going to sleep with your sister. Unless you stop me, Henry.

Suddenly Henry grasps the pistol, jerks it free of Bon's hand stands so, the

pistol in his hand, panting and panting; again Bon can see the whites of his inrolled eyes while he sits on the log and watches Henry with that faint expression about the eyes and mouth which might be smiling.

—*Do it now, Henry, he says.* (285-286)

このときボンが毛布の下から取り出し、ヘンリーに手渡すピストルが、ある種のファリック・シンボルであるという解釈は (Duvall 114-15、Jones 353-54)、本稿の文脈においても有効であり、有り体に言えば、ボンは「俺を殺して＝犯してみろ。さもなければ俺はお前の妹を（象徴的にはヘンリー自身を）犯す」と脅しているのだ。納屋で奴隷たちに立ち向かうサトペンと同様、ヘンリーは今まさに「暴力＝犯す／犯される」の原理が支配する闘争の場に立たされているのである。

さらに問題は、ボンを白人と認識していたとき、ヘンリーが「妹であり、(ボンの)恋人であり、(ボンの)花嫁である存在に変身して」ボンに処女を奪われたいという欲望を抱いていたことである (77)。この欲望は、ボンが白人のままであったら、妹を媒介として差し出すとともに、自らがボンとの関係において「弟」の役割を果たすことで象徴的に叶えられていただろう。あるいは、ヘンリーは「ボンが望むようなことであれば、たとえそれが不名誉なことであってもやろう」(264)と決意している以上、ヘンリーは本当に性行為（挿入される）におよびさえしたかもしれない。ヘンリーのホモエロティックな欲望が、このように「挿入される」側の欲望として見出されるのは、あの納屋での暴力とエロティシズムの関係に鑑みたとき、偶然ではありえない。なぜなら、Thomas Loebel が示しているとおおり、ヘンリーが「教育」としてサトペンのマスキュリニティに同一化することを求められるとき、そこヘンリーが持つ欲望は、サトペンに「なる (to be)」ことの欲望であると同時に、サトペンのマスキュリニティを「所有する (to have)」こと (89)、すなわち、サトペンに犯されることの欲望でもありうるからだ。しかし、すでに示したとおおり、白人同士のホモエロティシズムにおいては、挿入する／されることの欲望それぞれがホモソーシャルティの象徴化を経て許容されているのであり、ヘンリーは己の欲望の、自身のマスキュリニティを損ないうるトラウマティックな側面に向き合う必要はない。

ところが、あろうことかボンは黒人なのだ。つまり、ここでヘンリーが遡及的に見出す自身の欲望とは「黒人に犯されること」なのである。すでに述べたように、サトペンが「暴力」によって白人と黒人の差異を生み出したとき、そこには「振るわれざる黒人の暴力」への恐怖と欲望が見出されたが、だとすれば、南部白人のマスキュリンな自我を、黒人との間に発生するエロティシズムにおいて常に「挿入する」側に立つことで保存しようとするヘンリーに、「黒人に挿入されること」の恐怖と欲望が回帰することは、実に当然というべきだろう。とはいえ、ヘンリーの属する南部のイデオロギーにおいては、「黒人に犯されることへの白人の欲望」を言語化＝象徴化する手段はない。つまり、ヘンリーが「黒人の肉体への欲望を見出す」というよりは、自らを動かしている何らか

の衝動が、自身が言語化する欲望のどれでもなく、しかし、自らのマスキュリンな自我にとっては致命的なものであることを、ヘンリーは避けがたく見出してしまふ、といったほうが正確である。

ここに描かれるのは、自身の自我の一部を形成していたはずの欲望が、それを指し示すべき名を失ったクィアな欲望に変化し、自我に風穴を開ける瞬間である。そしてその名づけえぬ欲望は、幼い日に見た父と奴隷との肉体的接触において、彼を嘔吐させた「不気味なもの=現実界」とまったく同じであっただろう。結局ヘンリーは、「南部の父」としてボンを「正しく」撃ち殺す(=挿入する)ことになるのだが、その後の出奔と、死を前にしたヘンリーの様子を見る限り、南部人として「不気味なもの」を抑圧する彼の試みは失敗に終わったとみるべきだろう。そしてそのことを何よりも顕著に示すのが、ヘンリーの欲望の象徴化の過程を物語化しながら追っていったクエンティンが、物語の結末でやはり「不気味なもの」に出会ってしまっているということである。

3、憑依する黒人の肉体

最後に、ヘンリーのトラウマティックな体験が時代を超えてクエンティンに伝播していく過程を観察してみたい。クエンティンとシュリーヴの関係が同性愛的なものであることは、『響きと怒り』についての言及も含め、ヘンリー・ボン間のそれ以上に繰り返し指摘されている。たとえばシュリーヴが(寒がっているにもかかわらず)対話中基本的に上半身裸であること(とくに合理的な説明はされない)、クエンティンの視線が繰り返しシュリーヴの肉体に注がれ、その「ピンク色のほとんど毛のない肌」が繰り返し強調されること(176、220)などは注目されることが多い。また

Quentin and Shreve stared at one another—glared rather their quiet regular breathing vaporizing faintly and steadily in the now tomblike air. There was something curious in the way they looked at one another, curious and quiet and profoundly intent, not at all as two young men might look at each other but almost as a youth and a very young girl might out of virginity itself—a sort of hushed and naked searching, each look burdened with youth's immemorial obsession not with time's dragging weight which the old live with but with its fluidity: the bright heels of all the lost moments of fifteen and sixteen (240)

といった場面において、二人が今まさに互いを性的対象としてはっきり認識しはじめている男女に譬えられていることは、ほとんどあからさますぎるほど二者間のホモエロティシズムを前景化する。このエロティシズムの前景化が、二人がヘンリーによるボン殺害の核心にたどり着く8章の序盤で行われているのは興味深い。というのも、ボン

とジュディスの近親相姦説が披露される7章においては、彼らの想像は「背中合わせになって（南部の亡霊と）戦う」というわかりやすくホモソーシャルなイメージで語られていたからである。事件の核心に迫る「推理」がホモソーシャルな抑圧の弱体化と共に行われ、また「結婚」にも例えられる（253）のは、彼らが結局のところボンとヘンリーの「愛の物語」を語ることによって謎を解くことに鑑みると非常に示唆的である。彼ら自身の欲望に向き合うことによるのみ、クエンティンとシュリーヴは“the last ditch”を超えることができるのだ。

しかし、ボンとヘンリーの関係が「幸せな結婚」に終わらず、ボンを死に追いやりヘンリーの自我を崩壊させる結果に終わったように、クエンティンとシュリーヴの関係も、もちろん「幸せな結婚」で終わることはできない。そして実はその危険もまた“back to back”という表現に集約されているのだ。なぜなら、この表現は『アブサロム』というテキストにおいても一度だけ使われているのだが、それは（コンプソン氏の語る）ボンからヘンリーに対して発せられており、「決闘に挑む二人の男」を指しているからである（90）。ヘンリーとボンの中で決闘が、（サトペンと黒人の取っ組み合いのように）互いの欲望と自我をかけた性的な戦いを意味していることはすでに示したとおりだが、だとすれば、クエンティンとシュリーヴの関係もまた、単にホモソーシャル／ホモエロティックな関係ではなく、互いの生き死にに関わるような欲望の闘争の場に発展しうることを意味しているかもしれない。二人は、“the last ditch”を超えられたのではなく、その“ditch”（=現実界）に落ち込んでしまったのかもしれないのだ。

ところで、クエンティンとシュリーヴが“the last ditch”を超えることによって発見したのは、「ボンは黒人であったがゆえに殺された」という「南部の悲劇」であり、南北戦争を経てもなお人種差別的イデオロギーに支配される南部の姿である。そしてそのことは同時に、クエンティンが自らを南部人＝悲劇の主人公（になりうる存在）として自己をアイデンティファイすることを意味している。そしてそれはもちろんヘンリーとの同一化によって可能となるのだ。しかし、クエンティンは「正しく」ボンを殺したはずのヘンリーがまったく英雄的ではなく、ほとんど退行的に（子宮を思わせる小部屋で）死にかけているのを発見している。その姿は、彼が「父の法」の代行者になりきれず、ボンを殺すことによって己の欲望を抑圧、象徴化することにも失敗し、黒人であるボンへの欲望を名づけえぬまま反復し続けていたであろうことを示す。そしてクエンティンはシュリーヴとの「推理」によって、ヘンリーのトラウマティックな姿（クエンティンにとって妹を守ったはずの英雄が退行的に死にかけている、という事態そのものが外傷的である）を物語化＝象徴化し抑圧しようとするのだが、そこで発見されるのは、異性愛も、ホモソーシャルリティも、近親相姦も、南部の人種差別の物語さえすり抜けて現れる、欲望の究極の対象としての黒人なのである。そして、クエンティンの「推理」が、南部人としての自己同一化によってしか可能でない以上、そこで見出された名づけえぬ欲望とクエンティン自身は無関係ではありえない。クエンティンは自身のうちにも「悲劇」に還元されない不気味なものを感じ取るだろう。

そして何よりも重要なのは、ヘンリーがいつけん黒人には見えないボンを欲望したということは、白人同士のホモエロティシズムにおいても常に人種混交の危機は存在するのであり、また、ホモソーシャリティと共犯関係にあるヘテロセクシュアル規範にも（ホモソーシャリティがホモエロティシズムを含む以上）、可能性としては黒人男性への欲望が隠されているかもしれず、ようするに、全ての欲望に人種混交的なホモセクシュアリティの可能性が潜んでいるということである。だとすれば当然、クエンティンはいま目の前にいるシュリーヴとの関係にも（より正確には彼と対峙する自身の欲望にも）不気味なものを発見しないではいられない。8章で謎解きが行われ9章に入るまでの間に、シュリーヴが窓を開けていることに注意しよう（288）。このことは、クエンティンとシュリーヴが閉じこもっていた旧南部から時間的・空間的に切り離された密室が、旧南部空間と接続してしまったことをまずは示す。窓を開けたことによってもたらされる寒さが、クエンティンとシュリーヴに、野営地でのヘンリーとボンの会話を再演させることは、二つの世界の接続を端的に示している。

Bon pauses and looks at Henry; now he can see Henry's face. He says, — You will be cold. You are cold now. You haven't been asleep, have you? Here.

He swings the cloak from his shoulders and holds it out.

—No, Henry says.

—Yes. Take it. I'll get my blanket. (284)

“Jesus, are you that cold?” Shreve said. “Do you want me to spread the overcoats on you?”

“No,” Quentin said. “I’m not cold. I’m all right. I feel fine.”

“Then what are you doing that for?”

“I don’t know. I cant help it. I feel fine.”

“All right. But let me know if you want the coats.[”] (289)

このときクエンティンは、ボンを殺し、そして自らその一部であるような「南部」という空間を発見すると同時に、窓の向こうには「この世のものとは思えぬ薄ぼんやりとした雪明り」が広がっているのを見ることによって、この世（＝南部）の外側の領域を見出ししている。そしてそこから侵入する外気は、すでに南部の悲劇を発見し“feel fine”の状態にあるクエンティンを、そのカタルシスにもかかわらず、耐え難く震わせるのである。なぜなら、もしもヘンリーがボンに対して感じていたものに黒人に対する欲望が存在するなら、いま、クエンティンがシュリーヴに感じているのもそうであるかもしれない。「腰まで裸になって (naked to the waist)」(20) 取っ組み合っていたサトペンと奴隷に、まったく同じ表現 (naked to the waist) (176) で表される上半身裸のシュ

リーヴが重なりさえしたかもしれない。そしてクエンティンの不安を裏付けるように、シュリーヴは恐ろしい予言をする。

Then I'll tell you. I think that in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemisphere. Of course it won't quite be in our time and of course as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits and the birds do, so they won't show up so sharp against the snow. But it will still be Jim Bond; and so in a few thousand years, I who regard you will also have sprung from the loins of African kings. (302)

シュリーヴは、ジム・ボンドの子孫が世界を席卷し、あろうことか、自身がジム・ボンドの子孫でありうる可能性を自ら示唆するのだ（遠い未来であることはそれほど問題ではない。すでにクエンティンとシュリーヴは50年の時をさかのぼったのだから）。サトペンとヘンリーが二代にわたって抑圧しなければならなかった黒人の肉体は、サトペン家が滅びてなお残り続けるが、それはいまシュリーヴに憑依しようとする。サトペンと黒人の取っ組み合いを、あるいはヘンリーによるボンの殺害を自ら再演しなければならないかもしれないクエンティンの“I don't hate it”というヒステリックな否定の繰り返しは、ボンの正体を知った直後、ヘンリーのボンに対する“No!”という言葉の繰り返しと響きあっている（Jones 341）。クエンティンは、自身が南部人であることが証明されたまさにその瞬間に、南部的イデオロギーそのものを内破させかねない究極的な他者、すなわち黒人の肉体への欲望を（言語化されない外傷として）見出す。それは言語化されないがゆえに身体的な反応（震え）として表現されるほかなく、クエンティンが意識できるのは“Nevermore of peace”という根源的な不安の感覚だけなのである。

注

¹ 諏訪部浩一はこうした「南部悲劇」という枠組みが人種問題を再抑圧する構造について詳しく論じ、『アブサロム』がその「悲劇性」を脱構築する自己批判性を内在させていると主張している（諏訪部、332 - 455）。本稿は、登場人物たちがそれぞれに行う「事件」の象徴化（物語化・悲劇化）を阻む要素がテキストに内在することを主張する点で、これと意見を同じくするが、諏訪部がその脱構築的要素を、ローザ・コールドフィールドを中心とした女性キャラクターたちに見るに対し、本稿は、男性キャラクターたちに内在する黒人のトラウマティックなイメージをその中心と考え、その起源に遡って分析することで明らかにしていくという手法をとる。

² たとえば Hönnighausen を参照。

³ たとえば Don Merrick Liles は、1955年に Ilse Duso Lind によってはじめて指摘され

て以来、ヘンリーとボン、およびクエンティンとシュリーヴのホモエロティックな関係が注目されていく過程を丁寧に追ってみせる (Liles 99-101)。

⁴ Godden (256)、藤平 (51-52)、Bibler (84) などを参照。

⁵ このときサトベンは目の前で自分を拒絶した黒人ではなく、その背後にいるはずのまだ見ぬ白人領主を敵視し、いつか自身が金持ちになった暁には、「かつての自分のような貧乏白人の子どもを迎え入れること」によって、南部の階級差別的イデオロギーを打ち破ることを誓う。こうしたサトベンの階級闘争的な「イノセンス」を評価する Dirk Kuyk Jr. や Kevin Railey などの批評家も少なからず存在するものの (Kuyk 3-27、Railey 116)、近年ではこうした「イノセンス」自体に潜む、結局は人種差別的なサトベンの人種意識を批判する意見が多数派である。たとえば Thadious M. Davis は、「“monkey nigger” との出会いは ... 自身のデザインを、既存の社会秩序および一般に流布する倫理秩序に適應するものとしてサトベンに認識させる」のであり、「サトベンの生き方は、南部において支配的な生き方とよく調和している」と述べている (Davis 185)。

⁶ 黒人たちに対する暴力は、実際に、戦後の再建期において奴隷制度というたがが外れることによって強烈に回帰することになる。Cash 113-117 参照。

⁷ 同様の観察はクエンティンの祖父によっても行われており、Loise Westling は、「コンプソン将軍はトマス・サトベンと黒人たちの本質的な類似性に気づいているにちがいない」と述べる (130)。後述するが、サトベンと黒人の肉体的描写は、納屋での戦いのシーン以外でも繰り返し強調されており、両者の近似性は観測者の主観的印象を超えたレベルでテキストに刻み込まれていると言えるだろう。

⁸ たとえば納屋での戦いにおいては、すでに触れたようにサトベンが「黒人化」することによりその力が垣間見えるものの、本物の黒人は敗北し地に横たわっている (この構図は、そそり立つ “a huge bull of a nigger” と、横たわるサトベンの父という組み合わせを、正確に反転させたものとなっている)。また、あの “a huge bull of a nigger” がどれだけその膂力を見せつけようと、彼が実際にサトベンの父を殴り倒したわけではない。唯一、黒人の暴力が顕在化するように見える事例は、サトベンがハイチで体験したという黒人反乱なのだが、これについて語る時もサトベンは「黒んぼたちが山刀を構えて襲いかかってきたときに、どうやって畑から包囲された家の中へ逃げ込んだか、詳しくは語らず」(201)、戦いの最中の描写においても、彼はただ窓の外の暗闇に弾丸を放つだけで、そこに黒人奴隷の姿は一度も登場しないのである。そもそも、それが奴隷たちの反乱であることがわかったのも、反乱に反対して殺されたと思われる「混血の男の死体」をサトベンが発見したからであり、黒人の暴力は常に痕跡としてのみ発見される。また Jeff Karem は、フォークナーが草稿の段階ではこの箇所を襲い来る黒人の姿を明記して他にもかかわらず、改稿の段階で反乱奴隷の具体的な描写をすべて削除していることを指摘しており (163-164)。黒人による暴力描写の不在が意図的なものであることを裏付けている。

引用文献

Adamowski, T. H. “Children of the Idea: Heroes and Family Romances in *Absalom, Absalom!*” *William Faulkner’s Absalom, Absalom!: A Critical Casebook*. Ed. Elisabeth Muhlenfeld. New York: Garland, 1984. 135-55.

- Bibler, Michael P. *Cotton's Queer Relations: Same-Sex Intimacy and the Literature of the Southern Plantation, 1936-1968*. Charlottesville: U of Virginia P, 2009.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. New York: Vintage, 1991.
- Davis, Thadious. *Faulkner's "Negro": Art and the Southern Context*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Entzinger, Betina. "Passing as Miscegenation: Whiteness and Homoeroticism in Faulkner's *Absalom, Absalom!*" *Faulkner and Whiteness*. Ed. Jay Watson. Jackson: UP of Mississippi, 2011. 75-91.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* New York: Vintage, 1990.
- Godden, Richard. "Absalom, Absalom! Haiti, and Labor History: Reading Unreadable Revolutions." *William Faulkner's Absalom, Absalom!: A Casebook*. Ed. Fred Hobson. Oxford: Oxford UP, 2003. 251-82.
- Hönnighausen, Lothar. "Violence in Faulkner's Major Novels." *A Companion to William Faulkner*. Ed. Richard C. Moreland. Oxford: Blackwell, 2007. 236-51.
- Irwin, John T. *Doubling and Incest/Repetition and Revenge: A Speculative Reading of Faulkner*. Expanded ed. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1996.
- Jones, Norman W. "Coming Out through History's Hidden Love Letters in *Absalom, Absalom!*" *American Literature* 76 (2004): 339-66.
- Karem, Jeff. "Fear of a Black Atlantic? African Passages in *Absalom, Absalom!* and *The Last Slaver*." *Global Faulkner: Faulkner and Yoknapatawpha, 2006*. Ed. Annette Trefzer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2009. 162-73.
- Kuyk, Dirk, Jr. *Sutpen's Design: Interpreting Faulkner's Absalom, Absalom!* Charlottesville: UP of Virginia, 1990.
- Liles, Don Merrick. "William Faulkner's *Absalom, Absalom!*: An Exegesis of the Homoerotic Configurations in the Novel." *Journal of Homosexuality* 8.3-4 (1983): 99-111.
- Loebel, Thomas. "Love of Masculinity." *Faulkner Journal* 15.1-2 (1999-2000): 83-106.
- Railey, Kevin. *Natural Aristocracy: History, Ideology, and the Production of William Faulkner*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999.
- Sedgwick, Eve Kosofsky, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Sugarman, Helen Lynne. "'He Was Getting It Involved with Himself': Identity and Reflexivity in William Faulkner's *Light in August* and *Absalom, Absalom!*" *Southern Quarterly* 36.2 (1998): 95-102.
- Westling, Louise. "Thomas Sutpen's Marriage to the Dark Body of the Land." *Faulkner and the Natural World: Faulkner and Yoknapatawpha, 1996*. Ed. Donald M Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1999. 126-42.
- Žižek, Slavoj. *How to Read Lacan*. London: Granta, 2006.

諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学——1930-1936』松柏社、2008年。

藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想——『アブサロム、アブサロム!』の真実』研究社、2008年。